

平成 30 年度第 3 回講演会 記録

日 時	平成 30 年 5 月 12 日
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	NPO 法人白神山地を守る会代表理事 永井 雄人先生
演 題	白神山地のブナ林を守り育む
備 考	参加者数 173 名（会員 172、聴講生 1）、記録 岩佐 達

はじめに

田中克先生

現役時代に日本海の水際の生き物の代表としてヒラメの稚魚の調査を各地で進める中で、ヒラメは海の生物ではあるが真水との関係が深く、白神山地のブナ林がヒラメの稚魚を育むという考えに辿りつきました。このことがきっかけになって、2011 年秋に陸奥湾のホタテ貝の養殖に白神山地のブナ林が貢献しており、そこでも森と海のつながりが見られることを、畠山さん、林野庁の末松さん、それに私が加わりいろいろな角度からお話しする機会がありました。2011 年の国連森林年に際し、アジアを代表して畠山重篤さんがフオレスト・ヒーローズに選ばれるわけですが、おそらく末松さんの大きなバックアップがあったのであろうと思われます。そしてこの仲介をしていただいたのが本日講演をいただく永井雄人さんであります。もう一つのご縁は永井さんはスキーがお好きなので、スキーを指導いただくという名目で冬に青森に出向く連絡を毎年しているのですが、いまだ実現せず、今日大阪でのご講演が先行してしまいました。今日は永井さんの実践に基づいたお話を楽しみにしております。

永井雄人先生

いつもは妻と農作業に明け暮れており、たまには母ちゃん孝行をしなければと家内と一緒にきました。父親は営林署に務めており一緒によく山にいきました。家内は山に行くのは好きではないですが、とってきた山菜などを料理するのは上手です。私はピークを目指す山歩きはあまり好きではないのですが、白神山地のブナ林からの新鮮な空気をいっぱい浴びて山菜をいっぱいとってることが大好きで、ずっと通い続けてきました。白神山地が世界自然遺産になる前からのことです。そして 1993 年に白神山地が世界自然遺産に登録され、そして今年でちょうど 25 年、四半世紀がすぎました。今日は第一部で白神山地の魅力、特徴、由来、天然記念物クマゲラや植生、マタギのことなどを、第二部では世界遺産登録の経緯などをご紹介します。

【第一部】

1. 白神山地の魅力と特徴

- (1) 青森県南西部から秋田県北西部の県境を中心とした広大な山岳地帯で、全体の面積は 13 万 ha。内約 1 万 7 千 ha が 1993 年 12 月に世界自然遺産に登録された。自然環境保全地域・森林生態系保護地域に指定される他鳥獣保護や河川での禁漁など種々の法制により保護されている。
- (2) 東アジアで最大規模の原生的なブナ林。ブナは北海道から九州まで各地で生育する日本の冷温帯林を代表する落葉広葉樹だが日本海側は日本ブナ（シロブナ）、太平洋側はイヌブナと種類が少し違う。ブナの実は 5～7 年に一回程度豊作になるが、白神ではこの 7～8 年、毎年多くの花を咲かせ実になるものの、きちんと結実しない異常状態が続いている。

- (3) 動物ではニホンカモシカ、ツキノワグマ、クマゲラなどが特徴的だが、最近ニホンシカの害が問題になってきている。植物ではアオモリマンテマ、ツガルミセバヤが特徴。
- (4) 青森側の川は岩木川、追良瀬川、笹内川、赤石川の4川だが赤石川の源流部は日本海まで45kmもあり、金の鮎が有名。
- (5) 核心部への入山は秋田県側は入山禁止、青森県側は届出を提出する届け出制になっている

2. 白神山地の由来

- (1) 白神山地は1000m級の山がほぼ同じ高さで連なっているのが特徴。宝暦3年(1753年)作成の「津軽領内山沢図」にも白神岳と記載されており、白神の名称はその時代以前からあったがその由来には諸説ある。
- (2) 岩木山は津軽地方の山岳信仰の象徴と言えるオシラサマ信仰がある。オシラサマの響きが「白神」に通ずる。
- (3) 地名はアイヌ語と津軽語が共通に解釈できるものがありアイヌ語で「シリ・カムイ・タク(神の住む山岳)」がオシラサマ信仰より「シラカミ」に発展「白神岳」に定着でこの説が最も有力。
- (4) 白神山地の残雪を農作業の目印とした白神大権現の信仰などがある。

3. 天然記念物 クマゲラの記録

京大の川口先生が白神山地でクマゲラを見つけた。

カラスぐらいの大きさで赤い帽子、目は黄色で嘴は8cm程度、足の指は3本でなく5本ある。

木に穴を開け巣を作るが上下2段構えで入口、出口とする

見通しの良い所でまっすぐな木に巣をつくる。天敵のアオダイショウやテンが登って来ない木で、同じ木を何回も使うため穴が何個ができるが、ムササビやモモンガがそれを使う事もある。

この何年間にはなかなかクマゲラが見つからない。

4. 白神山地の植生

マルバマンサク、フクジュソウ、ミズバショウ、カタクリ、キクザキイチリンソウ、ザゼンソウ、タムシバ(ニオイコブシ)、ムラサキヤシオツツジ、オオバキスミレ、オオバクロモジ、シラネアオイ、サンカヨウ、タニウツギ、オオカメノキ、クルマバソウ、ツバメオモト、チゴユリ、ツクバネソウ、ホウチャクソウ、マイズルソウ、ウワミズザクラ、イタヤカエデ、ミネカエデ、ハウチワカエデ、フタリシズカ、ヤグルマソウ、アオモリマンテマ、イワカガミ、ガクウラジロヨウラク、エゾアジサイ、クガイソウ、クルマユリ、ギンリョウソウ、ツガルミヤバヤ、ミゾソバ、ツリフネソウ、ヨツバヒヨドリ、オトギリソウ、サラシナショウマ、ダイモンジソウ、クサギなど。

5. 消えゆくマタギ

- (1) 白神山地は決して原生林ではない。昔から津軽藩も薪を取ったり炭を焼いたりしてきた。その代表格がマタギである。
- (2) 狩猟の期間は年2回、11月~1月と3月~4月で今はライフルを使うが昔は槍一本で猟をした。
- (3) マタギはその日食べるものしか採らない。採るときは必ず根っこを残しておく。山とつきあい、大事にして感謝するのがマタギ。川魚を獲り核心部分を縦横に歩いたのがマタギである。
- (4) 世界自然遺産に登録した後はマタギは核心部分では猟はできなくなった。現在マタギでは生計を立てておらず、いずれ消えゆく運命にある。

(休 憩)

【第二部】

1. 青秋林道問題と白神山地の伐採の記録

- (1) S53年までに秋田県八森町のブナはほとんど伐採してしまい青森県側に大量に残っているブナを伐採、搬出するためのスーパー林道が計画された。これが青秋林道問題の始まりとなる。
- (2) 当初は秋田県側粕毛川上流の藤里町を通るルートが計画されたが取水源がなくなるとの地元の反対で青森県の赤石川源流域を通る鱒ヶ沢町のルートに変更された。
- (3) これに対しS20年3月の鉄砲水で大然集落が全滅、78名が死亡した事故を知る一ツ森地区の人達が反対運動に立ち上がり異議意見書に署名を集め県庁に提出、これを受けて当時の北村知事が公共工事の中止を決断した。

2. 一ツ森地区と白神自然学校

- (1) H12年ミニ白神遊山道のガイド養成講座の外部講師を1年間務めた。この時町長より一ツ森に廃校が出る。これを利用して白神ツーリズムをやりたいがとの相談を受け、地元の人達を活用した今のNPO法人の白神自然学校一ツ森校を提案した。
- (2) 実際に公共工事を止めた異議意見書を書いたのは一ツ森の人達で、その人たちが今自然学校で働いて語り部になっている。
- (3) 白神山地に来る大勢の人達がただ通り過ぎるではなく自然学校に寄ってもらい、地元の味を楽しんでもらったり、販売のお手伝いなど、何らかの関わりを持つ事で白神山を大切に思い、歴史を風化させないとの思いで作ったのが自然学校である。

3. ブナの森の復元、再生活動（植林活動）

- (1) 過去に切られてしまったブナを復元・再生しようとして2001年から植林活動を行っている。
- (2) 世界自然遺産はなかなか厳しくて、ブナの樹を他から持ってきてはいけない。DNAが違うからである。そのため4～5年に一度しかできないブナの種を拾って、それを40～50cm、1mの苗木に育てて山に戻すことを15年間行ってきた。
- (3) 苗木を育てるのは難しく、筑波の森林総合研究所との共同研究で5年をかけて今に至っている。
- (4) 2002年に第1回植樹祭を行い、以来毎年続けている。参加者はおばちゃん達の作った白神汁と赤石川の水で育った米で作ったおにぎりが無料で食べられる。
- (5) 陸奥湾のホタテ貝を守るための植樹活動も行っている。
2010年、陸奥湾の海水温が2度上昇し、ホタテ貝が壊滅した。それで漁師と組んでの植樹もするようになり田中先生にも来ていただいた。この植樹祭はホタテ汁が無料でいただける。
- (6) 1年間の作業として種拾い（最終的には人海戦術がもっとも有効）、種まき（危険を避けるため、秋蒔きと春蒔きの2回に分ける）、春の発芽、寒冷紗かけ、根切り（3年間毎年）、植林、ウサギネットをかぶせることなどがある。
- (8) 森林総合研究所との共同研究よりマルチトレーコンテナを使った苗木作りを導入。気候変動による森の異変にも対応するために種の保存に取り組む。缶詰や真空パックでの実験で3年は有効である。

【Q&A】

Q1: ブナが実を多くつける年は雪が多く降ると聞いたことがあるが事実でしょうか。

4～5年に一度多くの実をつけ他の動物に食べられる被害を少なくするため、雪の下に隠すというブナの戦略ではないかとかってに想像しているのですが。

A1: 実際は逆だと思います。4～5年に一度多くの実をつけて、他の動物に食べられて、それでも残ったものが次の世代を残す戦略だと思う。樹齢250年のブナはおよそ1万5千粒の種を落とす。実生として出てくるが日が当たらないのでほぼ死滅し、苗木になるのは1ha当たり5本くらいで、これも下草に負けることが多く、1本の成木になる条件は非常に厳しいです。

Q2: マタギは減り、クマの数が増える。人への影響はどうなりますか？

A2: 実際にクマは増えているがテリトリーの問題だ。昔は里山に柴をとりに頻繁に山に入ったがクマの被害は殆どなかった。今は山に食べ物が少なく里に下りて来ると、ごみ箱などに豊富に餌がある。何よりも人が餌をやる事が一番悪い。気候変動の影響、温暖化の問題も避けて通れない。豊かな森だがブナの実が成らず、食べ物がないうち、クマをどうやって奥山へ追いやるのか。人間との共存をどう図るか、白神の科学者委員会で検討しています。ニホンシカも白神山に入ってきている。マツクイムシ被害を防ぐ問題も含め、生態系をどのようにして保存していくかの検討が必要になっています。

Q3: マタギで生活できていますか。

A3: マタギで生活している人は少なく、ラストマタギになりつつあります。人が熊の被害にあったとき、市町村より害獣駆除の法による依頼で猟友会が出動、今はマタギより猟友会による駆除の数が多いのです。春にクマは出産して子供を連れており、危険性大であることを知っておく必要があります。

Q4: 映写された写真では冬にクマ猟をしているが、冬は冬眠しており外に出て来ないと思っていました。あれは冬眠を起こして猟をしているのですか。又、春先の冬眠から覚めたクマは痩せているのでは？

A4: 冬眠中にクマ猟に行く事はありません。クマは雪が降っても動き、ぎりぎりまで食べて冬眠する。たしかに春先のクマは痩せている。熊の胆のうは春の方が秋より大きく、春クマは肉より熊の胆のうのほうが高く売れます。(笑)

Q5: 会の運営資金確保のため、HPで「古本を送って白神山地を守ろう」と呼びかけをしておられますが、具体的にはどのような活動ですか。

A5: 地元スーパーに図書コーナーをつくりここで貸し出している。コーナーの前に大きな小屋があり古紙等の資源物を持って来た人に古本を無料貸し出ししている。この資源物を業者が回収し、年間何十万円かが自然学校に支払われています。

Q6: コンテナ苗に移行したということですが、その後うまくいっていますか。

A6: 今は林野庁の杉も含めて全てコンテナに移行しているが問題ないとみています。地植えと比べて効率がよい。ただコンテナ苗は平地では良いが斜面には弱い。傾斜地には地植えの苗を植樹しています。

Q7: 白神山地にナラ枯れの問題が起きていますか。

A7: まだ認めていません。

【田中克先生コメント】

白神山地のブナ林はある意味、日本の森の代表的な存在で、それが秋田、青森の日本海側にある事に意味があります。日本海を流れる対馬暖流から水分が蒸発し、大量の雪を降らし、積もった雪がゆっくりと地面にしみこみ豊富な地下水となり海に流れる。地下水を含めた循環が大切なことだと思います。豊かな森

があることで、里や海へ恵みをもたらし、人の営みにも関係して文化が醸成されます。

気候変動により雪の降り方が変わりつつある昨今、これからの白神山地のブナ林にどう影響するか、大きな問題になるのではないかと思います。

世界自然遺産とは何かという疑問について考えて見ると、都会に住んでいて屋久島や白神山地の素晴らしい自然がこれからも残っていてほしいということはあるが、一方、自然とともに暮らしてきたマタギにとってクマは敵ではなく、自然の中の一員であり、そのいのちを貰うことに感謝しながらの暮らしが、世界自然遺産の名のもとに失われてしまってよいのでしょうか。

今日は森と海のつながりを考える素材をたくさんもらいました。ありがとうございました。

以上